

## Hitachi Virtual Storage Software スタートバック ストレージ基盤 仕様表 (2023年7月時点)

提供モデル		スタンダード	大容量	
コンピュータネットワークスイッチ		種別	Cisco LANスイッチ (Cisco Nexus® 93180YC-FX)	
		プロトコル	ブロック (iSCSI)	
日立 アドバンスト サーバ HA8000V	機種		HA8000V/DL380 Gen10 24SFF NC	
	CPU		インテル® Xeon® プロセッサ × 2	
	メモリ		256GiB (32GiB×8)	
	ドライブ (システム)		1.6TB SSD×2 【RAID1*1】	
	ドライブ (データ)		3.2TB SSD×24*2 【RAIDなし】	6.4TB SSD×24*2 【RAIDなし】
Hitachi Virtual Storage Software Block	ノード数	Mirroring Duplication 構成	3~27*5	
		HPEC 4D+1P*3 構成	5~27*5	
		HPEC 4D+2P*4 構成	6~27*5	
	ユーザー 利用可能容量*9	Mirroring Duplication*6 構成	31~933TB (28~848TiB)	64~1,902TB (58~1,730TiB)
		HPEC 4D+1P*3*7 構成	80~1,461TB (73~1,329TiB)	166~2,853TB (151~2,594TiB)
		HPEC 4D+2P*4*8 構成	78~1,197TB (71~1,088TiB)	164~2,496TB (149~2,270TiB)
ストレージノード間ネットワークスイッチ		Cisco Nexus® 93180YC-FX		

※ 製品の改良により予告なく記載されている仕様が変更になることがあります。

※ 1GiB=1,024<sup>3</sup>バイト、1TiB=1,024<sup>4</sup>バイト、1TB=1,000<sup>4</sup>バイト、として計算した値です。

※ 上記はストレージ基盤の仕様です。ストレージ管理基盤の仕様については弊社までお問い合わせください。

\*1 本装置でサポートするRAID1 は、一般にはRAID1+0 と呼ばれます。RAID1+0 では、2台のドライブにまたがってブロックがミラーリングされ、複数のドライブペアにまたがってストライプセットが作成されます。

\*2 ドライブ台数は、24台から最小8台まで1台ずつ構成変更が可能です。

\*3 HPEC 4D+1P は、ユーザーデータの格納先とは異なる1ノードにデータ復元用の符号を格納しておく日立独自の Erasure Coding (Hitachi Polyphase Erasure Coding)によるデータ保護方式です。

\*4 HPEC 4D+2P は、ユーザーデータの格納先とは異なる2ノードにデータ復元用の符号を格納しておく日立独自の Erasure Coding (Hitachi Polyphase Erasure Coding)によるデータ保護方式です。

\*5 Hitachi Virtual Storage Software Block の仕様としては最大32ノードです。ノード数28~32 の構成をご希望の場合は、弊社までお問い合わせください。

\*6 最小3ノード~27ノードにおけるストレージクラスタの論理容量を表しています。

\*7 最小5ノード~27ノードにおけるストレージクラスタの論理容量を表しています。

\*8 最小6ノード~27ノードにおけるストレージクラスタの論理容量を表しています。

\*9 ストレージプールのデータ再構築 (リビルド)領域として確保される容量を除いて計算しています。

Cisco、Cisco Nexusは、Cisco Systems, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の一定の国における登録商標または商標です。

インテルおよびXeonは、アメリカ合衆国および / またはその他の国における Intel Corporation またはその子会社の商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。